［研究資料他］

栄養教諭としての実践的指導力を確実に身につけさせるための取り組みについて
～「到達目標の作成」及びその「成績評価の方法」を通じて～

About Action to Let You Acquire Practical Teaching Ability as the Nutrition Teacher Surely
～ Through Making of Achievement Goals and Method of Academic Grades ～

木村　亜希子*　　久保　富男*　　村上　謙藏*
Akiko KIMURA*　Tomio KUBO*　Kenzo MURAKAMI*

*青森中央短期大学　食物栄養学科
*Department of Food Dietetics, Aomori Chuo Junior College

Key words；栄養教諭、教職実践演習、到達目標、成績評価

１．背景と目的

⑴背景

中央教育審議会は平成18年７月の答申で「教員に対する揺るぎない信頼を確立するための総合的な改革の推進」を挙げ、そのための方法として「教育課程の質的水準の向上」をあげた。その具体化の１つとして、教育課程のカリキュラムに「教職実践演習（仮称）」を新設し、必修化することが提案された[1)]。

⑵目的

教職実践演習の目的は、「教職課程の他の授業科目の履修者や教職課程外での様々な活動を通じて、学生が身につけた資質能力が教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたかについて、大学が自らの養成する教員像や到達目標に照らして最終的に確認するもの」であり、いわば全学年に通じた「学びの集大成」として位置づけられるものである。学生は、この科目の履修を通じて、「将来教員になる上で、自己にとって何が課題であるかを自覚し、必要に応じて不足している知識や技能等を補い、その定着を図ることにより、教職生活を円滑にスタートすることが期待されるのである。」と提言された。

２．授業内容

教職実践演習の内容は、答申では、教員として求められる資質能力について、(1)使命感や責任感、教育的愛情に関する事項（2)社会性や対人関係能力に関する事項（3)幼児、児童理解や学級経営等に関する事項（4)教科、保育内容等の指導力に関する事項の４つを含めることが適当とされている。これらの項目を授業科目の中にどのように構成し実施するかは、各大学の判断に委ねられている。

本学が養成する教員像は、憲法をはじめ我が国の法令を遵守すると共に、本学の建学の精神である「万物に対する自愛（愛あれ)」「物事の本質を見通す叡智（知恵あれ)」「絶対的な真理の追究（真実（まこと）あれ)」を教育理念とし、豊かな人間性・倫理性・社会性・教職専門性を具備する心身ともに健全な教師である。その具現化を目指して、以下の５つの資質能力を掲げた。(1)教員としての使命感や責任感、教育的愛情に関する資質能力、(2)社会性や対人関係能力に関する資質能力、(3)児童生徒理解に関する資質能力、(4)食育内容等の知識・技術に関する資質能力、(5)児童生徒の安全や健康管理に関する資質能力である。これらの能力を育成することをねらいとし、「教師論」「食育指導」「児童・生徒指導」「学校給食経営」「組織・協働」「自由領域」の６領域を設定した（表１)。

表１．教職実践演習（栄養教諭）の授業内容と到達目標

領域	【授業内容】・到達目標	回数（１回は90分）
教師論	**【栄養教諭としての仕事全般と使命感や責任感、教育的愛情に関する事項】** 教職の意義、役割に対する理解をふまえ、望ましい教師像に照らして自らの到達点と課題の見通しをもつことができる。	3
食育指導	**【教科・特別活動等および給食時間における指導力に関する事項】** 食育指導の場面で、発達段階に応じた発問や教材活用を工夫した学習指導案を作成し、模擬授業を行うことができる。 食育の掲示物について食に関する興味・関心を高める内容を工夫したものを作成することができる。	13
児童生徒指導	**【学校給食における個別対応に関する事項】** 学校給食における個別対応が必要な事例の理解をとおして、個別対応の方法や留意点を説明することができる。	3
学校給食経営	**【食に関する指導・連携（校内、家庭・地域）に関する事項】** 食に関する指導の連携について、家庭・学校における事例から、連携して行う食育のねらいを理解し、それをふまえた食育全体計画、給食だより、指導資料を作成することができる。	5
組織協働	**【学校教育の運営・参画（校務分掌）に関する事項】** 学校教育における組織協働について、校内分掌における他分掌との連携を考察し、食育推進にあたってどのような協働体制をとるか説明することができる。	2
自由領域	**【教職実践演習のオリエンテーション、まとめ、栄養教育実習報告会】** 教職履修における自己課題を認識し、望ましい教員像に照らした自らの学習の到達度を確認することができる。	4

３．授業方法

授業計画の作成にあたっては、領域ごとの具体的な「到達目標」（表１）や「授業内容」を示し、確認のための「活動形態・方法」をも履修者に明示し、実践してきた（表２)。授業方法については、学校現場での視点（想定される場面）を取り入れながら、その内容を組み立てた。講義だけでなく、集団討論、事例研究、模擬授業、役割演技（ロール・プレイング）等、様々な形態を行ってきた。学生の状況に応じて、個別に補完的な指導を行ってきた。「成績評価の方法」については、「評価の観点」【Ａ～Ｄ】（表３）を示し、複数の教員（いずれも教職経験者３名）が多面的な角度から評価を行ってきた。

表２．平成26年度教職実践演習（栄養教諭）授業計画

回	【領域】・テーマ	到達目標	活動形態・方法
1 2	【自由領域(1)】 オリエンテーション 【教師論(1)】教師の仕事全般	・教職実践演習のねらい、基本方針、主な内容について確認し、実践的な指導力を高める意欲を持つ。個別活動をとおして自分の課題を確認する。	全体発表 グループ討議
3 4	【教師論(2・3)】 教師の仕事全般	・児童生徒を観ること、そして食育教育について立案して意図的計画的に育てることの大切さを考え、栄養教諭の役割について深くとらえることができる。教職の意義、役割に対する多角的統合的理解をふまえ、建学の精神を生かした望ましい教師像をもち、それに照らして自らの到達点と課題の見通しを持つ。	講義 個別活動 グループ活動 ロールプレイ
5 6	【学校給食経営指導(1・2)】 食に関する指導の連携 （食に関する全体計画） （家庭との連携）	・学校で食育を進める上での校内における連携の必要性を理解し、食に関する指導の全体計画を作成する。 ・食育を進める上での家庭との連携について、給食だよりが有効な手段であることを学び、給食だよりを作成することができる。	講義 個別活動
7 8	【学校給食経営指導(3・4)】 食に関する指導の連携 （家庭との連携） （校内での連携）	・作成した給食だよりを発表し、相互評価を行うことでよりよい給食だよりの内容について検討することができる。 ・集会活動における全校児童（生徒）を対象とした食育の指導を行う場面での、集会活動と食育のねらいの関連、栄養教諭の役割を理解することができる。また、集会活動で食育指導を行う際の指導資料として、スライドを作成することができる。	全体発表 講義 個別活動
9 10	【学校給食経営指導(5)】 食に関する指導の連携 （校内での連携） 【児童生徒指導(1)】 個別指導の在り方 個別指導の対応① （肥満傾向児）	・作成した指導資料を用いて発表し、相互評価を行うことでよりよい指導内容について検討することができる。 ・栄養教諭が行う個別指導の在り方を理解し、個別指導が必要な児童生徒への対応について、教職員の連携や実際の指導方法について学ぶ。	全体発表 講義 VTR視聴 全体での 質疑と検討
11 12	【児童生徒指導(2・3)】 個別指導の対応② （食物アレルギー）	・食物アレルギーのある児童生徒の現状と問題点を理解し、栄養教諭が行う個別指導の在り方について理解する。	VTR視聴、グループ討議、全体での質疑と検討
13 14	【食育指導(1・2)】 発問、板書	・自ら学ぶ力を育てるため、意図的な発問の在り方について、栄養教育実習での研究授業の記録（ビデオ）を分析する。また、板書の働きについて理解するとともに、児童の思考を促し、子どもが主体的に学ぶ板書の在り方について学ぶ。	講義 グループ討論 解説
15 16	【食育指導(3・4)】 教材研究	・児童が食に関して興味・関心を持ち、自ら学ぶ授業を作るためには、児童と教師の教材相互の関連を図った教材研究が大切であることを理解し、「児童に食べ物について考えさせること」「問題解決のために使うこと」の観点で教材分析を行うことができる。	講義 グループ討議
17 18	【食育指導(5・6)】 学習指導案 一時間の指導過程 模擬授業の準備	・求める授業の実現に向け、学習指導案の意義・具備すべき内容について学び、これまでに作成した自己の指導案を修正することができる。また、子どもが分かっていく過程を重視した一時間の展開について学び、自分の指導案の一時間の展開部分を修正することができる。また、教材・教具を準備し、模擬授業への意欲を高める。	講義 個別活動
19 20	【食育指導(7・8)】 模擬授業と授業研究①	これまで学んできた様々な指導技術や授業の見方を模擬授業研究を通して確認させ、授業の技量を高める意欲を持つ。	学年別の授業 授業研究会
21 22	【食育指導(9・10)】 模擬授業と授業研究②	これまで学んできた様々な指導技術や授業の見方を模擬授業研究を通して確認させ、授業の技量を高める意欲を持つ。	学年別の授業 授業研究会
23 24	【組織協働(1・2)】 協働が求められる校務分掌 食に関する指導の連携 （地域との連携）	・校務分掌や食育全体計画について、事例に基づく活動内容とそのための他分掌との連携を考察することを通して、協働しながら実働していることを学ぶ。 ・食育を進める上での地域との連携について、連携の必要性や方法などについて実践例を通して理解を深める。	講義、質疑応答 個別活動 グループ討議 発表
25 26	【食育指導(11・12)】 食に関する興味・関心の 喚起	・児童生徒に対し、学校給食や食生活に対する興味・関心を高める手段として、食に関する掲示物（ポスター）が有効な手段であることを学び、掲示物を作成することができる。	講義 個別活動
27 28	【食育指導(13)】 食に関する興味・関心の 喚起 【自由領域(2)】 栄養教育実習報会	・作成した掲示物（ポスター）を発表し、相互評価を行うことでよりよい掲示物の内容について検討することができる。 ・栄養教育実習を振り返り、授業実習、児童や教職員、学校給食にかかわる活動との関わりなどについての実施事項について学んだことや反省点をまとめ、1年生の栄養教諭履修者に伝えることができる。	全体発表 グループ討議
29 30	【自由領域(3・4)】 まとめ	・「魅力ある教員像」について、これまでの学びと経験を通して育った自分に気づかせると共に、望ましい教員となるための決意の機会とする。	個別活動 教員からの激励とメッセージ

表３．領域ごとの評価の観点

領域	内容	A：十分到達している	B：到達している	C：ある程度到達している（指導助言のもとにできている）	D：到達が不十分である
教師論	望ましい教師像	望ましい教師像に照らして自己の課題を明確にし、解決のための実現可能な方策を持つことができる。	望ましい教師像に照らして自己の課題を明確にできる。指導助言を受けながら解決の方策を持つことができる。	指導助言を受けながら、望ましい教師像に照らした自己の課題を明確にできる。	望ましい教師像に照らした自己の課題のとらえ方が不十分である。
学校給食経営指導	食育全体計画	学校における食育の意義を理解し、食育の全体計画を作成することができる。またそれを生かして食育の諸活動を適切に指導できる。	学校における食育の意義を理解し、食育の全体計画を作成することができる。またそれを生かして食育の諸活動を指導することができる。	学校における食育の意義を理解し、食育の全体計画を作成することができる。またそれを生かして食育の諸活動を指導しようとしている。（指導助言のもとに）	学校における食育の意義は理解しているが、食育の全体計画を作成することができない。また食育の諸活動の指導は場当たり的である。
児童・生徒指導	食育活動の活性化 個別指導 要望への対応 家庭への対応	食育活動充実のための諸課題の背景や対策を検討し、組織的・継続的に、見通しをもって進め、なおかつ柔軟に対応できる。	食育活動のための諸課題の背景や対策を検討し、組織的・継続的に進めることができる。	食育活動学充実のための諸課題の背景や対策を検討し、組織的・継続的に進めようとしている。（指導助言のもとに）	食育活動充実の諸活動の背景や対応の検討が不十分である。また組織的・継続的に進めることができない。
組織協働	校務分掌	校務分掌の意義・内容を理解し、組織の一員として各分掌の連携を図った機能的かつ実践的な計画を立案し、実行できる。	校務分掌の意義・内容を理解し、組織の一員として各分掌間の連携を図った計画を立案し、実行できる。	校務分掌の意義・内容を理解し、組織の一員として実働していることが分かり、（指導助言のもとに）計画を立案し、実行できる。	校務分掌の意義・内容は理解し、組織の一員として実働していることは分かるが、計画の立案・実行ができない。
食育指導	教材研究 指導案作成 模擬授業	深い教材研究を基にした指導案を作成の上、基本的な指導技術を駆使し、子どもの反応に応じた柔軟な指導ができる。	深い教材研究を基にした指導案を作成の上、基本的な指導技術を駆使し、子どもの反応に応じた指導ができる。	教材研究を基にした指導案を作成の上、基本的な指導技術に意を用い、子どもの反応に応じた指導をしようとしている。（指導助言のもとに）	教材研究を基にした指導案は作成できるが、基本的な指導技術は（未熟であり、）不十分であり、子どもの反応に応じた指導ができない。
自由領域	オリエンテーション 栄養教育実習報告会 教職実践演習の まとめ	望ましい教師像の理解の上に学んだ内容を生かし、学習指導、学校給食経営、生徒指導等、学校全般を視野に入れた実践目標を明確にできる。	望ましい教師像の理解の上に自力で学んだ内容を生かし、学習指導、学校給食経営、生徒指導等について、個別に実践目標を明確にできる。	望ましい教師像の理解の上に指導助言を受けながら、学んだ内容を生かして実践目標を明確にできる。	望ましい教師像の理解が不十分で、実践目標を明確にできない。

A：十分に到達している。一人でできる。任せておけば工夫したり先輩に聞いたりしながら自力で問題解決し、実践できる。
B：到達している。ある程度一人でできる。管理職や先輩の目配りが必要。自分で課題をもって解決のために奔走できる。
C：ある程度到達している。管理職や指導者の助言があればできる。本人は不安をもっている。
D：到達が不十分。指導助言をしても容易にできない。本人は問題意識をもっているものの解決のための方策をもてない。実行できない。

４．領域ごとの演習事例

ここでは「教師論」「食育指導」「学校給食経営」「個別指導」の各領域から主な演習事例を報告する。各領域を担当した教員による気づきに基づいて、授業の計画、授業の記録、成果と課題、今後の課題について述べる。

A「教師論」の実際

(1)授業の計画

表４．テーマ：教師の仕事全般

回	到達目標	内容	活動形態・方法
教師論(1)	個別活動をとおして自分の課題を確認する。	・小論文作成	・個別活動
教師論 (2)(3)	児童生徒を観ること、そして食育教育について立案して意図的計画的に育てることの大切さを考え、栄養教諭の役割について深くとらえることができる。教職の意義、役割に対する多角的統合的理解をふまえ、建学の精神を生かした望ましい教師像をもち、それらに照らして自らの到達点と課題と見通しを持つ。	・心に伝わり、意欲を引き出す教師の一言と活用 ・建学精神に関する「朝ごはん」3分間スピーチの構想づくり	・講義 ・個別活動 ・グループ活動 ・ロールプレイ

(2)授業の記録

①授業の流れ

１回目の「小論文作成」は、はじめに課題イメージマップ作業を行い、それをもとに小論文作成を行った。小論文の分析結果は表５～７のとおりである。２回目は「心に伝わり意欲を引き出す教師の一言と活用」について、学校の教育活動における教師の激励の声がけや児童が夏休みに家庭で行うお手伝いについて絵日記を書くことを題材として演習を行った。まず児童の背中を押す激励の一言については、いろいろな場面を想定しながら気づきを出し合った。この教師の一言は表８である。次にグループ全員が児童として絵日記を書いた後、教師役は絵日記へのコメント、児童役は教師のコメントを見ての感想を記入し、児童役と教師役でロール・プレイング形式の発表を行なった。コメントの分析結果は表９・10のとおりである。３回目は「建学精神に関する朝ごはん３分間スピーチの構成づくり」について、３つの建学精神の心のうち１番強調したい言葉を選択し、児童に対してのスピーチを構想（図１）して発表を行った。

表５．食育教育の「生きる力」の基礎づくりの視点からの自己課題

領域／自己課題		豊かな生き方の学び 命のリレーへの気づき 自然のめぐみを食べて、感謝する共生力の芽生え	成長の課題解決への学び からだと食べ物への気づき 健やかに成長するための食べ方の創意工夫力の芽生え	郷土再発見の学び 食文化への気づき 食習慣と食文化のよさの観察力の芽生え	人間の絆の学び こころのふれあいへの気づき 友だちと楽しい食事で培われる共感力の芽生え	よりよい自分への学び 自己実現への気づき 自己健康管理能力の芽生え
使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項	教育に対する使命感や情熱を持ち、常に子どもから学び、共に共感する	・食事行為はいつでもだれでもができる行為ではないことや人が生きていくにも欠かせないものであることに気づかせ、食べ物を大切にする行動ができるように学び合う。	・子どもの食べ物に関して疑問に思ったことを大事に取り上げたり、栄養や体のメカニズムまで楽しくわかりやすく学ぶ授業に心がける。	・学校だけではなく、地域の特産品、郷土料理について身近な人に取材したり、調べたりして食について前向きな学び合いを展開する。	・日常生活には、授業で学んだことが多くあることに気づかせる。・昨年実施した幼稚園の観察学習を通して学んだ子どもへの接し方を授業に生かしたい。	・正しい食習慣を身につけることは重要だ。そのための栄養教諭の役割は大きい。
	高い倫理観と規範意識、困難に立ち向かう強い意志を持ち、自己の職責を果たす	・食べ物は多くの人々の苦労や努力に支えられていること、動植物から命をいただいて生きていることに気づかせる。 ・世界には、食べられないで苦しんでいる子どももいることを考えて、ものを大切にすることができるように学び合う。	・給食の時間における指導等、子どもの記憶に残る楽しい食育授業を実践できるようにする。	・自分の住んでいるところの郷土料理・季節・行事にちなんだ料理の魅力と受け継がれてきた心を学び合う。 ・教職員や保護者、地域の人たちとの協働力を身につける。	・子どもとの交流が大切であり、特に子どもの顔と名前、性格を知った上で、積極的に話しかける姿勢を身につけるようにする。	・食育に関する正しい知識を伝えるためには、まず教師が食への知識を深め、自ら学ぶ姿勢を常に持ちながら得たものを、学び合いの中に生かしていく。
	子どもの成長や安全・健康を考え、適切に行動する	・元気になるためには、いろいろな栄養素の働きについて気づかせて実行できるようにする。 ・子どもが自ら食べ物への感謝を行動で示せるような学び合いをする。	・三大栄養素等いろいろな食品から栄養素を摂取しなくては成長できないことを学び合う。 ・朝ごはんの大切さやおやつの食べ過ぎなど、食事の摂り方の工夫に気づかせる。	・伝統的な和食のよさについて、家庭の日常生活の場で気づかせる。	・授業では子どもとのコミュニケーションを大事にしながら、楽しい食事をするための心づかいに気づかせる。	・アレルギーや肥満の子どもが増えているので、普段から相手の気持ちを考えて指導する。

表６．教師の「使命感」「責任感」「教育的情熱」に関する気づき

使命感	・食育の授業の中で、自己の好き嫌いを克服した体験を聞かせ、子どもたちに食事の大切さに気づかせる。 ・心のケア、コミュニケーションができ、子どもたちに信頼される教師になる。 ・多くの授業に触れて、わかる授業の工夫をする。
責任感	・子どもが自ら食べ物に感謝することをかたちにあらわして、行動できるように指導する。 ・子どもたちに、幼いころから正しい食習慣を身につけさせる。 ・他の教師と協調し、自分の職責を果たせる教師になる。
教育的情熱	・野菜づくり等、体験学習を取り入れた楽しい授業づくりをしたい。 ・視覚的な教材づくりをして、食育の授業を工夫したい。 ・今日的な食育教育情報に気をつけて、それを授業で活用したい。

表７．「魅力的な教師像・自己課題・具体的な手立て」への気づき

番号	魅力的な教師像の到達目標	自己課題	具体的な手立て
1	・子どもの質問になんでも答えられる信頼される教師	・楽しい授業づくり	・子どもの目線にたった授業計画 ・疑問を持って、子どもに追及させる。 ・クラス全体、子ども一人一人を見る観察力を養いたい。
2	・楽しい食育の授業ができる教師 ・保護者の心を動かし、気軽に相談しやすい教師	・人見知りで受身的性格やものの考え方を変える。 ・多角的に物事を捉え、行動できる力を身につける。	・わからないところは積極的に質問し、他の人との交流を進め、コミュニケーションを高めたい。
3	・子どもの好奇心を育てる教師 ・身近な質問に応じられる幅の広い教師	・コミュニケーションはある方だが、食に関する知識を身につけるために勉強に励みたい。	・日頃より、子どもとのコミュニケーションを図る。
4	・子どもの食への知識を深めるとともに、食に関心を持ってもらえる授業ができる教師	・自分の食への知識を深める必要がある。 ・子どもと上手に接する仕方を身につける。	・興味を持って授業を受けられるようにする。 ・体験できる授業づくりをする。
5	・わかりやすく指導できる教師	・子どもに理解してもらいたいので、わかりやすく指導できるようにする。 ・子どもの理解度を高めるには、コミュニケーション能力を高める必要がある。	・教材づくりは、子どもの気持ちを想像しながらやる。 ・話し方や話す速さに注意する。

表８．場面にふさわしい児童の背中を押す教師の一言（声がけのことば）

	心の安定	心を動かす	心がつながる	心がはずむ
児童と教師の姿	○信頼等に気づく ▲寄り添う (児童:○、教師:▲)	○考え方の違いに気づく ▲いろいろな見方や考え方に誘う	○頑張りに気づく ▲やる気を支える	○達成感・探究心に気づく ▲学び合いのよさに共感する
自己決定感を促すことば	・○○ができたら、△△もできるようになるよ。(授業等) ・ピーマンが食べられたから、次は○○も食べられるようになったら、もっと元気が出るよ。(給食中)	・いい考えだね。じゃあ、○○と比べてみたらどうなるかな。(授業等) ・○○のことをよくわかっていてすごいね。君も△△博士になれるぞ。(意見発表等)	・今食事のことで学んだ○○のことについて、今度から実行できるかクラスみんなでやってみよう。(授業中) ・○○君は、どんないいところがあったかな。(意見交換等)	・クラスみんなで力を合わせて頑張ることで、「やったー。」という気持ちが生まれるよ。だから、みんなで、頑張ろう。(やる気のない児童へ等)
有能感を促す認めのことば	・嫌いだったニンジンもよく食べられたね。(給食中) ・自分の気持ちを一生懸命話していて、気持ちが伝わってきましたよ。よくがんばったね。(発表等)	・先生は○○が正解だと思ったけれど、△△という考え方もできるんだね。よく気がついて、素晴らしいよ。(授業等) ・○○君はこう考えたけれど、△△君は□□と思うんだね。(授業等)	・今の意見はみんなと違った意見だったけれど、○○の点からみるとどうかな。(授業中) ・とてもいい内容です。いいところを見つけましたね。よく観察していると、いろいろなことがもっとわかるようになりますよ。(授業中)	・朝ごはんのお手伝い、頑張ったね。きっとお母さんもすごく助かっているよ。次も頑張ったことを先生に教えてね。(発表等) ・○○さん発表ありがとう。とても詳しくまとめられていて、わかりやすかったですよ。(意見発表)
共感的人間関係を促す励ますことば	・少しずつでもいいからこれからでも頑張ってみようね。君ならやれるよ。(授業等) ・その調子でどんどんやってみよう。○○君らしい考えがでてくるよ。(授業等)	・そうか。○○さんの考え方はすごいな。ほかに○○さんの意見につけ足してくれる人はいませんか。(授業等) ・○○君の言ったことを忘れないでください。(授業等)	・○○さん、よく頑張って△△を実行できたね。そのかいあって少しずつ体重が減っているようだよ。これからも頑張ろう。(個別指導)	・全部食べられなくても、一口頑張ったね。えらいよ。(嫌いな食べ物へ挑戦する児童) ・こんな意見を言えるなんて、○○さんすごいね。先生もびっくりしました。次からも頑張ってね。(意見発表)

表９．児童への言語表現：絵日記文への激励のコメント書き

存在感	・○○さん、おてつだいえらいね。おかあさんもたすかるね。(注:絵日記の内容) ・えがとてもじょうずにかけていますね。かぞくのこえがきこえるようです。(夕食のお手伝い)
連帯感	・ははのひに、おとうさんとふたりでカレーをつくるなんて、すごいな。(母の日に) ・みんなのためにいっぱいれんしゅうして、じゃがいもをきれるようになったんですね。すごいです。(夕食のお手伝い)
責任感	・てがしわしわになったのは、がんばったしょうこです。よくがんばりましたね。(食器洗い) ・いっぱいあるかいものを、ひとりでまちがわずにかえましたね。えらいなあ。(夕食の買い物)
達成感	・おさらやおはしをちゃんとみんなならべて、おかあさんからありがとうといわれてうれしいですね。これからもてつだってあげてね。(お皿並べ) ・○○さんは、たくさんのおてつだいをしましたね。たべものざいりょうをかうことからおかたづけまできちんとおかあさんのおてつだいができていますよ。よくやりました。(お手伝い)
貢　献	・いわれなくても、じぶんからおさらならべのおてつだいをするのはいいことです。(お皿並べ) ・おさらをこわさないように、ていねいにこころがけてやるやさしさがうれしいですね。(お手伝い)
創意工夫	・ハートのかたちのハンバーグをつくったのは、○○さんらしいですね。(ハンバーグづくり) ・かぞくのたべるごはんのりょうをかんがえてもるのは、すばらしいことです。(夕食のご飯もり)

②演習成績評価について

履修者18名について、評価の観点に照らして評価した。「教師論」領域の結果は以下のとおりである（表11）。以下、他の領域についても同様に評価を行った。

表10．評価の観点別人数

A　十分に到達している	4人
B　到達している	10人
C　ある程度到達している	4人
D　到達は不十分である	0人

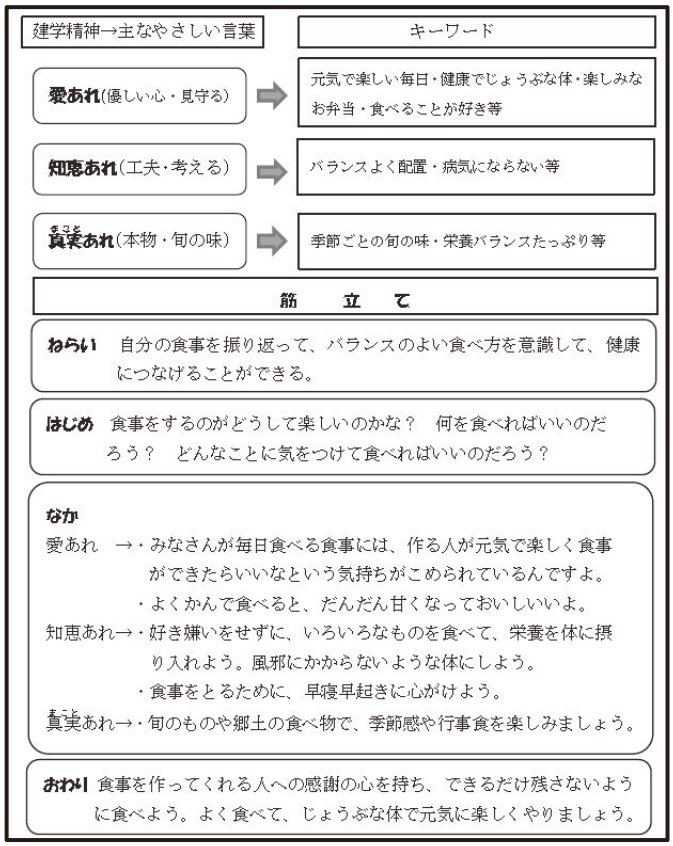

図１．「３つの心」がこもった朝ごはん
（３分間スピーチの構想づくり）

(3)成果と自己課題

「教師論」（テーマ：教師の仕事全般）の成果と課題について、学生の気づきと自己課題と思われること（表11）と、教員による効果と課題を示した（表12）。以下、他の領域についても同様に示した。

表11．学生の気づきと自己課題

気づいたこと(わかったこと)	自己課題
ア　使命感 ・食育の授業で学習したことを、日常生活でも 実践できるよう にさせる。 ・食育についての正しく 理解させ、よりよい成長につながるよう に指導することが大切だ。	・知識理解から実践を促すための学校と家庭の連携について ・自己健康管理能力が身につくよう な指導の工夫について
イ　責任感 ・子どもたちとの約束は責任をもって果たし、手本となるよう に努めることが大事だ。 ・子どもたちがわかるまでしっかり教える。 ・わかりやすく 楽しい授業をする。 ・学校は教師間の情報交換と助け合いで支えられている。	・信頼関係を深めるとともに、子どもの有能感を促す指導の工夫について ・教師の子ども主体の授業力の定着向上について ・学校組織における自己の役割の充実について
ウ　教育的情熱 ・教師から進んで声をかけ、子どもたちの言葉に耳を傾け、誠実に対応する。 ・教師と子どもとの距離を 考える。 ・一人で考えるより、複数で意見を出し合い、予想が立てられるよう 互いに協力し合う よう にする。	・子どもの居場所づくりや信頼関係の構築について ・子どもへの厳しさと優しさのある教育愛について ・課題解決学習での「ねりあい」の場の活動について

表12．教員による効果と課題

指導上の効果	授業上の課題
教師の使命感・責任感・教育的情熱等は、大学の学びと相まって、教育実習校での経験から得るものが大きく、再度自分で振り返る姿勢になっている。	学生はこれまで栄養教諭に直接接する機会が少ないため、栄養教諭と他の教諭との教師像への理解にやや欠ける面がある。
教師の心を寄せる言語活動指導の習得は、前掲の演習等の学びから定着しつつある。	児童生徒の目線で接することの大事さは理解していても、コミュニケーション等を生かした魅力ある教師としての習得方法には改善の余地がある。
前年度の本学幼稚園での観察学習及び実践活動は今年度の学びに役立っている。	自己の教師像の確立には、学習指導要領はもとより幼稚園教育要領にも十分な理解が必要である。

(4)「教師論」領域における今後の課題

①授業内容の見直し

本学科生の人間形成にあたっては、「どのような場面でも相手の立場を第一に考え行動できる思いやりの心や人々の健康の維持や増進に尽くしたいという使命感」の育成を柱の一つとしている。そのため、これまで、「教師論」領域では本学幼稚園での観察学習・実践活動、祖国の子ども支援活動家講話等の学習活動をも取り入れて、本演習到達目標の「栄養教諭の役割」、「建学精神を生かした教師像」等のポイントに効果的に働くよう、主に教師としてふさわしい精神面の基礎に意を用いてきた。

今回の実践演習や栄養教育実習後でも、教師としての厳しさやコミュニケーションの取り方等に学生の自己反省点が強かった。そこで、次年度では、今日の食育教育の動向を踏まえての学びや本学の「あおもり食育サポーター事務局」※１）の食育活動にも適宜参加しての基礎固めをもとに、緊要の食育教育課題解決を使命として実践できる資質能力の向上を図る。その際、特に「組織・協働」領域との連携の工夫も検討する。

②授業方法の見直し

本領域では、「教員としての使命感や責任感、教育的愛情に関する事項」を授業内容としている。次年度は、これまでのほかに、前述の事務局等と連携した食育実践活動から習得した学び（企画立案、創作教具づくり、コミュニケーション能力の向上等）による問題解決的な学習や言語表現活動の工夫をする。

③成績評価について

教員としての使命感や責任感、教育的愛情の評価基準を示すことは大変難しい。これらの資質能力は長年の経験の積み重ねによって醸成される面があり、より客観的な評価にするための情意評価等は今後の課題としたい。

B「食育指導」の実際

(1)授業の計画

表13．テーマ：模擬授業と授業研究

回	到達目標	内容	活動形態・方法
食育指導 (7)～(10)	これまで学んできた様々な指導技術や授業の見方を模擬授業研究を通して確認させ、授業の技量を高める意欲を持つ。	・学年別の授業 ・授業研究会	・模擬授業 ・授業評価シート(全員) ・授業評価シートによる質疑応答

(2)授業記録

①授業の進め方

ここでは主な授業内容として、「模擬授業と授業研究」について述べる。模擬授業は、学生が各自作成した学習指導案と教材を使用し、学生同士で教師役と児童役に分かれて実施した。各自の模擬授業終了後には、児童役の学生や教員からの意見やアドバイスを受け、授業改善に繋げるものとした。模擬授業実施の際は、授業評価シート（図２・３）を記入した。授業評価シートの「評定」については、「一般的な指導技術」と「学び方を身につけさせるための指導技術」のそれぞれにつ

いて評定を四段階でつけた。「コメント」欄には、「良かった点、参考になった点」を具体的に記述し、「努力・工夫を要する点」については、「〇〇〇〇のような発問、指示の方が適切だったのではないか」などのように具体的な改善方法について記述した。「コメント」はすべての項目について言及する必要はないが、どの項目についてのコメントかわかるように、各項目の横にコメントを書くこととした。また、模擬授業者も評価シートに自らの授業に対する自己評価を記入した。

視点	コメント（良かった点、参考になった点）
①授業前の集中	
②ねらいの明確化	
③指示の明確化	
④教具、ワークシートなどの活用	
⑤学習形態	
⑥板書、貼付物	
⑦つまづきに対する手立て	
⑧教師の声量	
⑨子どもへの目配り	
⑩表情	
評定	4　3　2　1

図２．授業評価シート
「一般的な指導技術（A）」

視点	コメント（良かった点、参考になった点）
①問題把握	
②既習事項などからの予想や見通し	
③発問	
④思考、話し合い、調べ学習など	
⑤子どもの反応の生かし方	
⑥まとめ	
評定	4　3　2　1

【評定】
4：大変良い、参考になる　3：良い、参考になる
2：努力・工夫を要す　1：かなりり努力・工夫を要す

図３．授業評価シート
「学び方を身につけさせるための指導技術（B）」

模擬授業後は「授業研究会」を実施した。授業者は自分の到達点と自己課題を明確にし、今後意欲的に栄養教諭として資質能力を高める契機になるように心がけることをねらいとした。はじめに、授業者は冒頭において、工夫した点、話し合ってほしい点について話し、それについて議論した後、「授業評価シート」の項目のうち重要と思われる項目から議論（発言）した。議論に際しては、授業評価シートの中から「B-③の発問についてですが、・・・」のように項目を明示する。司会は、担当の先生の指導助言を最低７分は確保するように配慮した。

②成績評価について

表14．評価の観点別人数

A　十分に到達している	B　到達している	C　ある程度到達している	D　到達は不十分である
5人	9人	4人	0人

(3)成果と課題

表15. 学生の気づきと自己課題

気づいたこと(わかったこと)	自己課題
・児童から予想も つかない発言、返答がかえってきた時	予想以外の発言に対応できるためのより深い教材研究について
・予想していた発言が少ない時	・子ども が予想しやすいよう な学習課題設定について ・予想が出ない時に補助発問を工夫すること ・一問多答になるよう な発言について
・児童にわかりやすい発問ができなかったとき	発達段階(低・中・高)に応じた発問について
・ノートのまとめ、プリント記入など、作業するスピードに個人差が大きい時	個人差に応じた支援の仕方について(机間指導を通じて)
・具体物、写真、絵などを使った授業に対してとても 意欲的に学んでくれた時	子ども が意欲を示す資料や教材提示について
・自分が楽しんで授業すれば、子どもも一緒になって楽しんでくれた時	子ども が中心となる授業の中で、教師の支援の工夫について
・教え込みの授業をすれば、子ども は楽しそう な態度をみせないことがわかった。	子ども が自分の力で問題解決する授業への転換について
・指導案通りの一方的な授業でなく 、子ども の反応を見ながら、会話するよう に授 業することが大切だとわかった時。	「子ども の反応の生かし方」(言葉のキャッチボールの仕方)の工夫について
・考える時間をきちんと確保することが大切だと気付いた時	一時間の授業の中での「考えさせる場」について
・たどたどしい発言でも 、言い終わるまで待ったり、熱心に聞く ことの大切さがわかった。	授業の中で共感的人間関係を育成するという ことは、どいう ことか。

表16. 教員による効果と課題

指導上の効果	授業上の課題
・模擬授業は、これまでの大学の学びと教育実習校の経験から、よく 準備されていた。	「学習指導要領で求められている授業像」について改善のポイントが理解できないでいる
・大学での学びで授業づくりの基礎・基本が定着しつつあること	授業づくりの基礎・基本である前掲の指導技術(A)(B)の視点への対応を十分に習得されていない。
・教育実習を前にしての夏季休業中での授業づくり(見せ合い授業)がモチベーション に役立った	教員採用試験(栄養教諭)の希望者が少ない状況であり、教育実習後の学生の本演習へのモチベーション が気になる。

(4)「 食育指導 」領域における今後の課題

①授業内容について

本学が育てる栄養教諭は、「学校での食育を充実させ、学校における食育を家庭や地域に発信できる」を到達目標に定めている。「食育指導」領域は、「食育指導の場面で……学習指導案を作成し、模擬授業を行うことができる。」を到達目標に定めている。今年の教育実習に向け、本演習では事前に「教材研究」「指導案作成」「模擬授業」の順で実践してきた。

実習先での授業展開については、やや「教え込み型の指導法」をとりがちになっていた。子どもの目線に立って、子どもの発言や質問を受け止めるべきだとわかっていてもその反応を活かす余裕がなかった感がある。次年度は「子ども中心の授業づくり」が身につくような発達段階に即した授業内容を工夫したい。

②授業方法について

本領域は「教科、特別活動等、および給食時間に関する事項」を授業内容としている。従って授業方法としては、「子どもが自分の力で問題解決する授業づくり」を重視した。そのため、発達段階に即した、様々な学習活動（グループ活動、言語活動等）を取り入れたい。更に子どもたちの学習意欲を喚起（驚き・疑問等）する「質」の高い教材・教具を工夫したい。

③成績評価について

成績評価の方法は、評価の観点【A～D】（表３）に照らして実施している。その中で「D－到達が不十分である。」の学生に対しては、教職実践演習終了後、２月上旬までに補完指導を実施する。

C「児童・生徒指導」の実際

(1)授業の計画

表17．テーマ：個別対応の指導（食物アレルギー）

回	到達目標	内容	活動形態・方法
児童・生徒指導 (2)～(3)	食物アレルギーのある児童生徒の現状と問題点を理解し、栄養教諭が行う 個別指導の在り方について理解する。	1.学校における食物アレルギーをもつ児童生徒の現状について 2.食物アレルギーに対応する校内での連携と栄養教諭が行う 個別指導の在り方について 3.食物アレルギーのある児童生徒への対応 4.学校における食物アレルギーの事例研究	・VTR視聴 ・グループ討議 ・全体での質疑と検討

(2)授業の記録

①授業の進め方

個別指導の一つとして、食物アレルギーの対応について実施した。ＶＴＲ視聴によって食物アレルギー児の実態、食物アレルギー児の保護者の様子、栄養教諭が行う個別指導の様子について確認した後、事例検討を行った。事例検討は、学校において食物アレルギーが原因で事故につながるおそれのあった事例として報告されているものから、子どもの年齢・アレルゲン・原因・症状・状況の経過等を示し（図４）、それぞれの場面で栄養教諭として考えられる対応について、グループで検討した。各グループの検討後全体での質疑と検討を行い、食物アレルギーの個別対応についてのポイントを確認した。

②成績評価について

表18．評価の観点別人数

A　十分に到達している	3人
B　到達している	9人
C　ある程度到達している	6人
D　到達は不十分である	0人

【事例検討】
以下の事例について、栄養教諭としてどのように対応すればよいか考えてみましょう。

(1) 先生が「残さないように」と言ったため･･･
年齢・性別 ：10歳 男児
アレルゲン ：キウイフルーツ
原因 ：給食にでたキウイフルーツ
症状 ：全身じんま疹、咳、喘鳴
経過 ：本人はキウイフルーツを食べて、喘鳴が出たことがあるため、医師からも食べないように指示されていました。しかし、先生から給食に出されたものは残さないようにと言われたため、無理に食べたところ、全身じんま疹と咳、喘鳴が出現しました。学校から緊急外来へ搬送され、抗ヒスタミン剤の内服、気管支拡張剤の吸入、ステロイドの点滴注射などをして落ち着きました。

解説 ：保護者からの食物除去依頼書の提出も医師からの指示書もなく、学校からの聞き取りもなかったことにより、事故が起きました。

【考えられる対応】

図４．事例検討資料の一部

(3)成果と課題

表19．学生の気づきと自己課題

気づいたこと(わかったこと)	自己課題
・食物アレルギー児の保護者は、不安やストレスをもっていることが多いが、子ども の周りの理解を促すために栄養教諭の支援が必要である。 ・食物アレルギー児への指導の場面では、子ども が少しずつ自己管理能力を身につけられるよう に、実際の給食を例に挙げて指導していた。 ・食物アレルギーによる事故を防ぐためには、教職員間での共通認識と連携、家庭との連携が重要であることと、事故が起こった場合の対応も想定しておく必要がある。	・実際に保護者に接する機会がなく、保護者と栄養教諭の関わりについてイメージするのが難しい。 ・子ども の発達段階に合わせて、食物アレルギーに関する知識を指導してく いこと。 ・教職員間や家庭との連携の必要性は理解できるが、実際の連携のイメージをもつのが難しい。

表20．教員による効果と課題

指導上の効果	授業上の課題
・VTRで視聴した様子から、保護者や子ども、栄養教諭の様子はよく読み取れていた。 ・栄養教諭が行う食物アレルギー児への対応について、事例から知ることができた。 ・児童や保護者に対する個別指導では、カウンセリングの技法も必要であることがわかった。	・子ども の発達段階に応じて、どのよう に計画し、何をどこまで指導していく のか十分に理解できないでいる。 ・学校給食での食物アレルギー対応の実情を知らないと、栄養教諭としてどのよう に指導するのか具体的なイメージを持ちにくい。 ・カウンセリングの技法は、知識をもっていても実際の場面で活かせるか自信をもてない。

(4)「児童・生徒指導」領域における今後の課題

①授業内容について

本領域では、栄養教諭が行う個別指導として肥満傾向児の個別指導と食物アレルギー児の個別指導を取り上げた。児童や保護者に個別指導を行う際には、児童の発達段階の理解に加え、指導計画の立案、学校給食の実情に合った指導、指導時のカウンセリングの技法などを、総合的に必要とする。これらに関する既習事項や経験を活用しながら、より実際的な指導に近い演習を行える授業を工夫したい。

②授業方法について

栄養教諭が行う個別指導については、栄養教育実習でも経験することがほとんどなく、学生が具体的なイメージを持ちにくいのが課題である。今回は栄養教諭が行う個別指導の場面をＶＴＲで視聴し、栄養教諭としての指導の在り方について検討を行った。授業をとおして個別指導の雰囲気をつかむことはできたと考えられるが、学生各自が実践力を身につけるためにはそれだけでは不十分であった。また、活用するＶＴＲはより具体的な事例で要点を絞って用いることができるものを準備する必要がある。次年度は、より学校現場の実情に近い事例をもとに、栄養教諭が行う指導場面について指導計画の立案やロール・プレイング等による演習を行いたい。

③成績評価について

本領域の評価も、評価の観点（表３）に沿って行った。授業の到達目標（表４）については、授業のたびに学生に示しながら実施しているが、それに対応した形の具体的な評価基準も検討していく必要があると思われる。

D「学校給食経営」の実際

(1)授業の計画

表21．テーマ：食に関する指導の連携（家庭との連携）

回	到達目標	内容	活動形態・方法
学校給食経営(2)	・食育を進める上での家庭との連携について、給食だよりが有効な手段であることを学び、給食だよりを作成することができる。	・給食だよりの目的と実際 ・給食だよりの作成	・講義 ・個別活動
学校給食経営(3)	・作成した給食だよりを発表し、相互評価を行うことでよりよい給食だよりの内容について検討することができる。	各自が作成した給食だよりの発表と相互評価	・全体発表

(2)授業の記録

①授業の進め方

食に関する指導の連携（家庭との連携）として、給食だよりの作成を取り上げた。作成にあたって給食だよりの実例を示し、給食だよりの目的、給食だよりの主な内容、作成・発行上の留意点について講義したあと、作成手順やパソコンでの作成方法を確認した。演習では学生各自が任意に設定した月の給食だよりを１枚作成した。給食だよりの発表では、作成した給食だよりを全員に配布し、作成者の思いや願いが伝わってくるか、子どもによくわかる表現になっているか、保護者によくわかる表現になっているかの観点から相互評価を行った。

②成績評価について

表22．評価の観点別人数

A　十分に到達している	B　到達している	C　ある程度到達している	D　到達は不十分である
4人	12人	2人	0人

(3)成果と課題

表23．学生の気づきと自己課題

気づいたこと(わかったこと)	自己課題
・保護者にも 子ども にも 興味をもってもらい、わかりやすい内容にするための工夫が必要である。 ・わかりやすい給食だよりを作成するためには、内容に関する情報収集を行い、適切に活用する必要がある。 ・テーマに合った内容や紙面のレイアウトを迷い時間ばかりかかる。	・興味を持ってもらう ための工夫の方法 ・給食だよりを作成するための適切な情報収集 ・情報収集と情報の活用・パソコン操作のスキル

表24．教員による効果と課題

指導上の効果	授業上の課題
・掲載したい内容に対してわかりやすく 興味を持ってもらう 紙面を作るには、言葉の表現やレイアウトの工夫が必要であることを理解できた。 ・パソコンでの作成手順や作成方法をある程度習得することができた。 ・給食だよりの発表と相互評価により、よりよい給食だよりについて比較検討し、自己評価をすることができた。	・給食だよりの内容が各月のテーマやねらいと乖離しないよう に注意する。 ・パソコン操作のスキルに個人差が大きく 、パソコン操作を苦手とする学生は思い通りに作成できないでいる。 ・各自が作成した給食だよりの改善点を検討し、不十分な場合は個別に指導する必要がある。

(4)「学校給食経営」領域における今後の課題

①授業内容について

本領域では、食育全体計画・給食だより・食育指導資料（スライド）の作成を実施した。授業内容は実務的に必要と思われるテーマを選択したが、栄養教諭が最低限身につけておくべき資質として適切なものであるか見直す必要がある。また、今回はパソコンでの資料作成を実施したが、パソコン操作を苦手とする学生は思い通りに資料を作成することに苦労していた。次年度は授業のテーマとする内容の見直しに加えて、履修者全員が一定のパソコン操作のスキルを身につけられるような内容も工夫していきたい。

②授業方法について

今年度は食育全体計画・給食だより・食育指導資料（スライド）についてパソコンで資料を作成し、発表と相互評価を行った。資料は、はじめの授業時に講義と作成の演習を行い、次の授業時に発表することで、資料を作成する時間を確保できるようにした。しかし、作成期間には作成中の資料を確認し、進捗状況によって個別に対応を行う必要があることから、次年度は授業計画を工夫することでより一人ひとりに合わせた指導を行えるようにしたい。

③成績評価について

本領域の評価の結果をみると、他の領域より「Ｂ到達している」の人数が比較的多いことから、ある程度のスキルを身につけることで到達目標を達成できる領域であると考えられる。次年度は履修者全員が成績評価の「Ａ十分に到達している」に到達できるように指導していきたい。

５．おわりに

今回の「到達目標」及びその「成績評価の方法」を通じて、栄養教諭としての実践的指導力を確実に身につけさせるため実践を重ねてきた。「教育の質の保障」を目指して、次年度以降は以下の課題に取り組みたい。

①「実践的指導力」の育成をめざしたより効果的な＜講義―演習＞の内容と方法の開発

②学校における食育を家庭や地域に発信できるための「授業内容」の工夫

③栄養教諭履修者数の増減に伴う「活動形態・方法」の工夫

④教職実践演習テキストの作成

※１）あおもり食育サポーター事務局

あおもり食育サポーター事務局は平成22度８月から青森県から業務委託を受け、青森県内の食育支援を行っている。平成26年度は「青森県あおもり食育サポーター活動推進業務」に基づいて業務を実施している。

参考文献

1）中央教育審議会：今後の教員免許の在り方について（答申)、2006

2）樫田健志ほか：全学教職課題における「教職実践演習への取組」(2）―試行の成果と課題及び本格実施の実際―、岡山大学教師教育開発センター紀要、第４号、123－132、2014

3）豊川裕之監修『心と体をはぐくむ　学年別・観点別　食教育の指導実践集―小学４、５、６年生―』、農村漁村文化協会、2007

4）斎藤周ほか：「教職実践演習」試行の報告と本実施に向けて、群馬大学教育実践研究、第27号、255－261、2010

5）小林美貴子、寺田貴雄：学生の視点の拡がりと深まりをめざした授業分析―教職実践演習における試みを通して―、北海道教育大学紀要（教育科学編)、第65巻、第１号、323－331、2014

6）村松和彦：平成24年度　教職実践演習試行報告、宇都宮大学教育学部　教育実践総合センター紀要、第36号、１－８、2013

7）梅津徹郎、近藤健一郎：教職必修科目「教職実践演習」の取り組みをふりかえって、北海道大学教職課程年報、４、１－14、2014

8）弘前大学教育学部附属教員養成学研究開発センター：教員養成学研究開発センター５周年記念報告会報告書、35、2010

9）弘前大学教育学部附属教員養成学研究開発センター：「教育実践演習」テキスト～「教員養成総合実践演習」からの円滑な移行を目指して～、153、2010